

現代仏具・偲ぶ空間の調度品のデザイン

富山大学高岡短期大学部と高岡仏具卸業協同組合との連携授業の報告

Report of the industry-university cooperation class on design for new altar fittings

● 河原雅典¹⁾, 渡辺雅志¹⁾, 高橋誠一¹⁾, 三船温尚¹⁾, 山本文夫²⁾, 石橋臣吾²⁾, 折橋祐紀²⁾

KAWAHARA Masanori¹⁾, WATANABE Masashi¹⁾, TAKAHASHI Seiichi¹⁾, MIFUNE Haruhisa¹⁾,
YAMAMOTO Fumio²⁾, ISHIBASHI Shingo²⁾, and ORIHASHI Hironori²⁾

¹⁾ 富山大学芸術文化学部 / The Faculty of Art and Design, University of Toyama

²⁾ 高岡仏具卸業協同組合 / Takaoka wholesale business cooperative of Buddhist altar fittings

● Key Words: Industry-university cooperation, Altar fittings, Design

要旨

近年の生活嗜好の変化の中で、伝統的な仏具が売れなくなっている。そこで新しく登場してきたのが、「現代仏具」と呼ばれるものである。富山大学高岡短期大学部専攻科では高岡仏具卸業協同組合と連携し、伝統的な仏具にとってかわる新しい「偲ぶ空間の調度品」のデザインに、授業の課題として取り組んだ。授業では、組合から仏壇、仏具の現状についての情報提供を受け、それをもとに学生が新しいデザインを提案した。学生は、従来の仏壇、仏具の範疇にとどまらず、自由なデザインを展開した。組合からは商品化という点からご指導いただいた。本報告では、学生デザインの内容、それに対する組合の意見、作品展示の効果、学生による授業評価、感想などから、この連携授業について考察した。学生のデザイン案はある程度の成果を上げていると考えられた。いっぼうで連携授業特有の授業運営上の問題点が浮き彫りになった。連携授業は共同研究ではないので、研究成果よりも教育効果を優先しなければならない。そのことを念頭に置いた相互理解が望まれる。

1. 連携授業の経緯と授業内容

三船温尚（芸術文化学部）

2006年から日本の人口は減少し、少子高齢化社会に移行していくと予想されていたが、実際にはその前年の2005年から人口減少が始まった。政府の予想を上回る速さで進む人口変化によって、これまでのさまざまな制度の見直しが迫られている。地方都市の高岡市は既に20年前から人口が減少傾向へ転化し、少子高齢化社会へ向けて歩み始めている。

今後は、こういった変化に伴って人びとの考え方、生き方の変化が目に見えるかたちで現れてくると思われる。この変化する時代の入り口にあって、学生たちが関わる「ものづくり」も新たな展開を模索しなけれ

ばならない。そして、彼らのものづくりがこれからの社会に貢献するものでなければならない。平成16年度後期に行なった高岡短期大学専攻科造形専攻1年生の「総合工芸演習」の授業では、21世紀の社会変化を予測し、ものづくりの具体的な提案を試み、実際にその成果を社会に問う内容で実施した。

大都市圏では、従来の仏壇とは異なる小型の家具調現代仏壇の需要が高まっている。これはただ単に生活空間や生活スタイルの変化ばかりでなく、仏壇そのものに対する人びとの考え方の変化にも少なからず理由がある。かつての荘厳を求めない宗教色を和らげた家具調の小型仏壇が求められるようになれば、それに合わせた仏具が必要となる。日本社会に深く根付いた仏壇・仏具さえも、社会変化によって大きく変わろうとしている。こういった変化はやがて地方都市に波及し、やがては全体の変化へとつながっていくことが予想される。

この授業は、高岡仏具卸業協同組合と連携して行なったもので、組合からは従来の仏壇、仏具の現状、変化の状況などの資料が学生に提供され、実際の工場見学で現代仏具製造について直接解説していただいた。こういった組合との連携をとおして、学生は、現代仏具あるいは故人を偲ぶ空間で使用する調度品の製品デザイン画をグループ作業と個人作業の二通りで提出した。このデザイン画を学内に展示し広く地域に公開した結果、地域のマスコミに取り上げられ注目を集めた。

この授業は58時間でおこない、前半は21名の履修学生を4グループに分けて取り組んだグループ課題Aとし、後半は個人課題Bとした。具体的な課題は以下のとおりである。

(1) 課題A (グループで取り組む課題)

・現代生活で求められる仏壇(あるいは故人を偲ぶ空間)を想定し、その中で使う仏具(あるいは調度品)を以下の①, ②についてデザインする。

①三具足(火立・花立・香炉)の機能を有する仏具(あるいは調度品)のデザイン

②様式にとらわれない仏具(あるいは調度品)のデザイン

(2) 課題B (学生個人で取り組む課題)

・課題Aと同じ

高岡仏具卸業協同組合は小型現代仏壇用の現代仏具における新商品開発研究、学生は社会変化のなかのものづくり学習という、共通したテーマを持って連携授業を実施した。学生の授業と産業界が連携する場合は、そのバランスに充分配慮した運営をしなければならぬ。学生がただ単に産業界にデザインを提供するような深みのない授業であってはならないだろうし、自らの研究努力もなく学生のデザインを待っているだけの産業界であってはならない。両者が刺激を与え合い、ともに研究向上できることを目的にこの連携授業をおこなった。

2. 連携授業に寄せる期待

山本文夫 (高岡仏具卸業協同組合理事長)

このたびの高岡短期大学と当組合との産学連携授業実施におきましては、各先生方のご協力に対し、深謝致します。

当組合では、若手の後継者も育ち始め、後継者を育成する環境をつくることも組合事業のひとつであると考えて取り組んでおります。

昨年からの大学側と事前に行いました合同会議議事録や組合委員会報告からは、今回の授業で、学生たちが真剣に作品に挑戦する姿を予想することができました。

高岡短期大学は開学当初から、地域産業との連携に前向きな姿勢を示されました。しかし、実際に連携してみますと、想像以上に積極的なアプローチをされており非常に感銘を受けております。

平成17年2月4日から、授業の成果である学生作品による『現代仏具・偲ぶ空間の調度品のデザイン展』を、高岡短期大学と高岡仏具卸業協同組合が共同で主催しました。専攻科産業造形専攻1年生が、平成16年10月からの「総合工芸演習」で考案した発想豊かな仏具デザイン約50点が一堂に紹介され、学生ならではの多様な感性に驚かされました。

平成17年2月18日には、仏具のデザイン展を受け

て企画した、学生と組合員との座談会が開催されました。様々な角度からの活発な質疑応答があり、当組合の青年部が積極的に参加できる環境をつくって頂き感謝いたしております。

現在、住宅事情と生活様式の変化から、仏壇のない住宅に対応できる仏壇などが市場に出回っています。当組合は、これからの時代に合った新しい感覚をとり入れた仏具のデザインを考える上で、若い学生の感性を参考にしたいと考えております。今回の連携授業から、今後の新商品開発に発展しますことを願っております。

3. 学生デザインの概要

渡辺雅志 (芸術文化学部)

学生デザインの概要をお話しする前に、その背景について少し説明します。

我々大学教員側が学生からデザインを導き出すにあたり、「課題のメインテーマは決まっている、ではどのような出題方法がベストであろうか。」を話し合うことからはじめました。メインテーマがあっても出題の方法によって生み出されるアイデアや作品は異なってきます。我々教員にとっても前例のない課題であり予測のつきにくいものでした。授業内容の説明は前項にありましたが、我々が意図した授業の流れは以下の通りです。

〈第一段階〉はじめはグループ課題としよう

リサーチやマーケティング等の調査は人数が多い方が収集しやすく、内容の幅も出るであろう。本学でも初めての課題であるし、まずは課題に対して深く内容を知らなければならない。

〈第二段階〉調査結果からグループで提案を行う

グループメンバーで協力し収集した調査内容からグループとしての統一したデザイン提案を行うことで、意見をまとめる力、互いの考えを聞く力、意見交換で得る積極性、共同作業における協調性等の過程を通して、より深く課題を理解することに繋がり、コミュニケーション能力を高めたい。

〈第三段階〉グループ提案から個人提案への展開

はじめのグループ課題を通して得た調査結果や提案をさらに発展させた個人のアイデアを展開し提案する。グループ提案を経て自己中心的な提案に陥らないように、第三者的視点からの提案を期待している。

このような流れを教員側として考え、出題方法を設定した。これらを踏まえつつ各課題で生まれた学生デザインについてコメントしたい。

(1) 課題A (グループで取り組む課題)

- ・現代生活で求められる仏壇(あるいは故人を偲ぶ空間)を想定し、その中で使う仏具(あるいは調度品を)を以下の①, ②についてデザインする。

①三具足(火立・花立・香炉)の機能を有する仏具(あるいは調度品)のデザイン

固定概念が少ない学生の視点からグループでリサーチし収集した情報から新たな提案を導き出す課題である。様々な視点で調査した結果が直接反映されたデザインが見受けられる。「六波羅蜜の考えを形状に応用することで付加価値を高める」「手入れのしやすさを追求することで、花は盆栽に変わり、ろうそくはアルコールランプとなる」「リビングに置いても違和感のないデザインとして木製の箱形状」「三具足(提案では五具足)が個々に分離するが集約することであたかも仏壇のような形状になる」「未使用時には本棚に収まる大きさ」「レイアウトが多彩」。どのデザインも一見仏具とは思えない形状をしている。素直にこれが今の学生の持つ仏具の感覚であり、特に若い年代にとって現代生活に求められると感じている仏具は今市場に流れているものではないと考えているようだ。伝統的な仏具が無くなることはないことは理解している上で全否定しているわけではないと思うが、全肯定でもないのである。

しかし、学生自身、ここで提案する自分たちの考えに賛同してくれる人がどれほどいるのか。これらが市場に出たときどこまで受け入れられるだろうか。また今ではなく将来には認められる価値を持つ仏具として考えられているであろうか。突き詰めればまだまだ変化すべき、生(なま)のデザインである。

②様式にとらわれない仏具(あるいは調度品)のデザイン

こちらは偶然にも統一した考え方となった。とにかく物体としてはひとつにし、その中で用を成してしまうという考えである。「厚みのあるフォトフレームには生花や思い出の品が入る」「小さな箱に個人の写真と砂時計を入れ、祈る時間を神聖な気持ちにさせる」「二重のガラスの箱で出来た香炉でアロマを焚き、写真を入れ、祈る時間を過ごす」「定期的に水滴が水面に落ち、その波紋をみて偲ぶ気持ちになる」。作法や制約がなく、様式にとらわれないため、人の気持ちに変化を起こさせることに重きを置いたデザインである。ただし、人の気持ちほど微妙で個人差が激しいものは無いとも言える。どれほどの人がこれらを使用することで、想定した同じ気持ちになれるのかという部分で検討の余地がある。

(2) 課題B (学生個人で取り組む課題)

- ・現代生活で求められる仏壇(あるいは故人を偲ぶ空間)を想定し、その中で使う仏具(あるいは調度品を)を以下の①, ②についてデザインする。

①三具足(火立・花立・香炉)の機能を有する仏具(あるいは調度品)のデザイン

グループ課題と内容は同じであるが、こちらは個人で取り組む課題である。傾向を分析しながらいくつかの括りで分け、コメントしたい。

「既存のかたち(自然物・人工物)をモチーフにしている」「安全性を考慮したかたち」「未使用時はコンパクトに」「壁掛け式」「乾漆の器」「自分で作りあげる」など。ここでは個人課題のため、より自由で制約のないアイデアが出てきたが、それは反面、他人の批評を受けずに生まれたものとも言える。グループでは意見をぶつけ合うことで、ある意味カドのとれた丸いデザイン(かたちではなく提案として)になりがちであるが、個人では決定権は自分自身。我が強い作品になる傾向が強い。そんな中、どれほどの作品がそのかたちや用途に意味を持たせているであろうか。単純にかたちの転用では意味がない。かたちにはかたちの必然性があり、用途や使用にははずせない感覚があるはず。

たとえ個人に決定権のある作品であっても、それを評価するもう一人の自分(他人)にいかになりきれるか。それが他者へ訴える作品の力になっていることを感じてほしい。他人になりきれた分だけ共感を呼ぶデザインに近づくとも言える。

②様式にとらわれない仏具(あるいは調度品)のデザイン

こちらも傾向を分析しながらいくつかの括りで分け、コメントしたい。

「故人を残す(名、手形、DNA、文章)」「いつも身につけていたい」「思い出の品を収める」「日めくりカレンダーで故人と会話する」「故人を偲ぶ行事を開催する」。どのようにして故人を近くに感じていたか。自然に偲ぶ気持ちになれる、普段の生活になじむ程度でいい。そんな想いがこれら学生の作品には詰まっているように感じる。

最後に学生のデザイン案のひとつを図1に示す。三具足(火立・花立・香炉)の機能を有する仏具のデザイン(個人課題)の一例である。この作品は現在製品化が進められている。

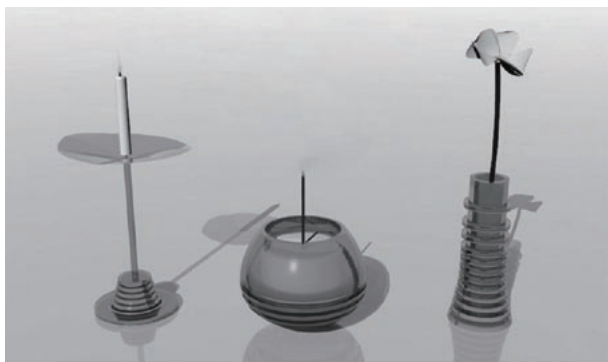


図1 今回の授業の中から製品化に向けて動き出したデザイン案。左から蓮の葉（火立）、蓮のつぼみ（香炉）、水面の波紋（花立）をモチーフに三具足へ展開。新規性、実用性、加工性が評価された。デザイン案ではガラス素材をイメージしていたが製品化は金属製の予定。「蓮の三具足」デザイン：中田久子

4. 学生デザイン展示の効果

高橋誠一（芸術文化学部）

平成17年2月4日（金）から、高岡短期大学 TSUMAMA HALL にて、学生作品であるデザイン画及び試作品を展示公開した。合わせて、高岡仏具卸業協同組合の協力により、伝統的な仏具と現状商品である現代的仏具を展示した。

この展示の第一の目的は、学生作品を本学学生、教職員のみならず広く一般に公開してその反応を受け取る事に有ったが、それ以外にも、目的の大きな部分は、高岡仏具卸業協同組合の組合員の皆様に見てもらふ事に有ったと思われる。この授業は、元々、高岡仏具卸業協同組合からの、問掛けに端を発して、出来上がった授業の課題内容であるが、その成果を、組合に還元する手段として、展示公開が、大きな役割を務めたように思われる。展示期間中、組合員の方々が交代で展示会場につめていただき、学生のデザイン画を充分時間をかけて見る事により、学生の考えを深く理解する事が出来たと思われる。展示会の後、学生作品に対して、一点一点コメントを戴いたが、膨大な数のデザイン画にも関わらず、結構突っ込んだ意見が多かったのは、この効果であると思われる。もちろん、一般来場者からの、反応も直接受け取る事が出来るのも、展示公開する事の大きな意義であることは間違いない。

また学生にとっての効果として、公共の場に展示公開する事により、自分の考えた事やデザインした結果を、客観的に見る機会が与えられる事になっていると思われる。自分の考えた事、デザインしたものを自分から切り離して、客観的に判断する事は、とても大事な事であるが、なかなか上手くいかない事でもある。展示公開は、その事を、効率よく行える場所である。

5. 高岡仏具卸業協同組合員のデザインコメントの概要（分析）

渡辺雅志（芸術文化学部）

第一回目となる今回は22名の組合員の方に約50枚のデザインに対して、約1000枚のコメントが寄せられました。

コメント記入用紙は以下の項目で作成しました。

- ・興味深い点
- ・評価できる点
- ・問題となる点
- ・改善すべき点
- ・その他

その中で出たコメントは主に以下に関するものでした。

- ・商品として成り立つかどうか？
- ・実用的かどうか？
- ・新しい価値観を創造しているか？
- ・価格として妥当かどうか？
- ・すでに商品として存在しているかどうか？
- ・価値観を共有できるかどうか？
- ・優れた提案はどの部分か？

細かいコメント内容に関しては割愛しますが、ここでのコメントのとらえ方について分析したいと思います。

デザインコメントというものは非常に主観的であり、個人の価値観というフィルターを通してコメントされたものはある意味すべて正しい。同じデザインでも評価する人の価値観や知見、立場によって判断基準は変わり、全く違う意見にもなる。

では何を信じ、何を取り入れればいいのだろうか。やみくもにコメントを書き、批評しているだけではお互いが時間の浪費だけで終わる可能性がある。私が思うに、自分たちの領域（ここでは学生や組合員としての）意見にとどまらず、相手側の立場や要望を理解しつつ素直に言い合える関係を築き、その中でのコメントは受け入れるべき意見といえるのではないかと考えます。いち消費者として第一印象をコメントすることも大切ですが、今回はその意見だけで終わるタイミングではありません。あくまでも産学連携として、これからの仏具を考える貴重な機会において、お互いが次のステージに進むためには、互いに共通した目標を持ちそれに対して必ず辿り着くという気概がなければ到底達成は出来ない。それほど人として重要な課題であり、永久に続くテーマであると思う。

ここで生まれたデザインは決して最終形態ではありません。産学連携という特色を最大限に生かして、よ

り良いデザインに変化していくべき原石にすぎません。この原石を進化させるためにはどうしたらいいか。かけらでもいい、一瞬の閃きでもかまわない、その発想、その着眼を、大切に育てていく方向でのコメントが重要ではないかと考えます。

6. 学生が回答した授業評価

河原雅典（芸術文化学部）

高岡短期大学では授業評価のためのアンケートを実施してきたが¹⁾、今回高岡仏具卸業協同組合との連携授業として行った総合工芸演習についてのアンケート結果から、学生がこの授業をどのように捉えていたのかを見てみよう。

アンケート結果は平成16年度のものである。17年度もこの連携授業は継続したがアンケート調査は実施していない。アンケート調査には高岡短期大学で使用している授業評価用アンケート用紙を用いた。アンケートには授業最終日に回答してもらった。履修者21名のうち19名から回答が得られた。質問項目及び回答結果を表1に示す。このアンケートは、各設問に対して、5段階の選択肢（1-全く思わない、2-あまり思わない、3-どちらともいえない、4-少しそう思う、5-大変そう思う）からひとつを選んで回答するものである。回答として選ばれた数字（例えば「どちらともいえない」ならば3）を点数とし平均値を求めた。回答結果は5点に近いほど良い評価を得たことになる。設問18はこの授業に対する総合評価（総合的満足度）であるが、その結果を図2に示す。

全授業の平均と比較して考えると設問2と設問11にこの授業の特徴が現れている。設問2「授業時間以外でこの科目のために費やした学習時間は週平均どの程度ですか」に対するこの授業の評価は、全体平均2.0に対して、4.3であった。この設問に対する回答1,2,3,4,5は、それぞれ「0～30分」「30～60分」「60～90分」「90～120分」「120分以上」を意味している。したがって全体平均2.0は週に「30～60分」授業以外に費やしたことを意味しているが、この授業の場合「90～120分」もしくはそれ以上の時間を費やしていたことになる。

これは設問2に対する評価と同じことを意味しており、課題が過多であったことが原因である。課題が過多であることが、良いことかどうかの判断は別にして、過多であると学生が感じたことは明らかである。

アンケートには自由記述欄も設けてある。そこには「この授業の良かった点」と「改善すべき点」について学生の意見が書かれている。以下に示す。

表1 授業アンケートの設問と回答結果（5点満点）
回答の平均値を示す。回答欄、括弧内の数値は高岡短期大学のすべての授業の平均値である。

設 問	回 答
1. 授業に積極的に取り組むことができましたか	4.2 (4.1)
2. 授業時間以外でこの科目のために費やした学習時間は週平均どの程度でしたか	4.3 (2.0)
3. 出席率はどうでしたか	4.6 (4.6)
4. 授業内容に興味がもてましたか	4.4 (4.1)
5. 授業内容を理解できましたか	4.2 (3.9)
6. この授業で得るものがありましたか	4.3 (4.2)
7. 教員の授業への取り組みは熱心でしたか	4.4 (4.5)
8. 課題作りや授業の方法に工夫はみられましたか	4.2 (4.2)
9. 授業開始・終了の時間は守られていましたか	4.5 (4.5)
10. 休講回数は少なく、適切に授業が行われていましたか	4.8 (4.7)
11. 授業の進行速度は適切でしたか	3.7 (4.1)
12. 話は聞き取りやすかったですか	4.4 (4.1)
13. 視聴覚機器の利用や板書は適切でしたか	4.1 (4.1)
14. 教材・資料等はわかりやすく工夫されており、効果的でしたか	4.4 (4.1)
15. 学生が質問や発言をしやすいように配慮されていましたか	4.6 (4.1)
16. 学生に対する言動に差別や偏見はみられましたか	4.7 (4.6)
17. 健康や安全についての配慮は十分でしたか	4.6 (4.4)
18. この授業を評価するといかがですか	4.2 (4.1)

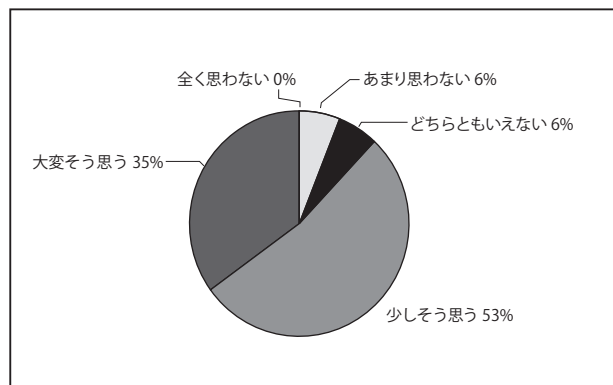


図2 この授業に対する総合評価（総合的満足度）

〈良かった点〉

- ・未知の世界を考えることができた
- ・グループ、個人とで課題が四つもあったのは大変だったが、未知の分野での視野が広がり、とても勉強になった。仏具が身近に感じられるようになった。
- ・グループや個人の作業の違いが知れた。アイディアの展開の仕方が今までより広がった。
- ・学外の企業等からの実際の要望に答えていくという良い課題を与えられた事
- ・地域と連携した課題で良かったと思う

〈改善すべき点〉

- ・個人作業とグループ作業の二つは大変
- ・グループのみで良かった気も…。
- ・大変でした。
- ・課題の内容が忙しすぎて、しっかり取り組めなかったもので、もう少し絞って欲しかった。
- ・学生と直接仏具組合の人が話す機会が一度しかなかったのも、もっと現場の声を聞く機会が欲しかった。
- ・仏具組合からの要望に加えて先生の課題としての要求や先生同士の意見がまとまっていなかったりしました。結局何にこたえて良いかわからず純粋に課題に取り組むこと以外に惑わされることもあった。デザイン力がついたとは思えない。

上記の自由記述を見ればこの授業の問題点がより明らかになる。問題点はまず、課題が過多であったことである。本報告冒頭の「1. 連携授業の経緯と授業」にあるように、今回の授業課題は三具足の機能を有する調度品と様式にとらわれない調度品のデザインが課題であったが、この二つの課題についてグループ作業と個人作業を行ったので、合計四つの課題を科せられたことになる。作業量が多すぎると学生が感じていたことは、数値からも自由記述からも明らかである。授業計画の段階では、グループ課題を先にしてそのなかで多くのアイディアが出されるが埋もれるので、それを個人課題で復活させ、さらに良いものにする、という目論見であった。しかし実際には前半のグループ作業で、ある程度の達成感と疲労感を覚え、後半の個人課題に意欲があがらない人が少なくなかった。

量の点で問題のある課題設定であったが、総合満足度を示す設問 18 では全体平均 4.1 に対して 4.2 で、ほぼ平均並みであった。これも自由記述の「良かった点」を見れば明白であるが、課題過多ではあるが内容が充実しており、学ぶところは多かったようである。

ここで取り上げた平成 16 年度の授業評価結果を受け

て、17 年度は課題を減らした。前半のグループ課題はそのままだったが、後半の個人課題は、三具足の機能をもつ調度品、もしくは様式にとらわれない調度品かのどちらか一方で良いことにした。17 年度はアンケート調査を行っていないのでデータは示せないが、課題量に関する問題については改善なされたと考えている。

しかし自由記述の「改善すべき点」にある最後の記述の通り、組合と大学側の意識の違い、教員間の見解の相違などのために、学生が混乱したことも事実である。今後の課題としたい。

7. 高岡仏具卸業協同組合青年部員の感想

石橋臣吾（高岡仏具卸業協同組合青年部）

平成16年8月から打ち合わせを進め、高岡短期大学と高岡仏具組合との産学連携授業の「現代仏具を考える」という取り組みが開始されました。仏教徒であることは知っていても、「宗派は？」という質問に答えられないというのが大半を占めるであろう、「仏教」というものからは遠く離れた今の20代の若者が、「仏壇」や「仏具」をどのように考え感じているのかを知る、良い機会だと思ってこのプロジェクトに参加させて頂きました。

戸出銅器団地の工場や仏壇を販売している店の見学など、わずかな事前学習ではありましたが、学生のデザインからは、現在の高岡から全国に発進されている仏具から、かけ離れた発想が多くみられ、私自身が知らないうちに仏具に対して固定観念に縛られていたことに気付かされました。今後、連携協力するにあたって、仏具組合会員からの意見と高岡短大の教授や学生からの意見を産学連携プロジェクトに反映させ、仏壇・仏具の業界に留まらずあらゆる分野に通用するような新しい感覚の「MAIDE IN 高岡」の商品誕生の手助けができればと思っています。

折橋祐紀（高岡仏具卸業協同組合青年部）

平成 17 年の 2 月、仏具組合青年部会に所属していた関係で、高岡短大の教授、学生、組合関係者の人たちと話をする機会がありました。授業の一環として、新しい仏具をテーマに学生がグループと個人で三具足や故人を偲ぶ道具をそれぞれがデザインし、それを実際に販売している仏具問屋が評価し、その評価した資料を基にお互いの意見を交換する座談会でした。

宗教離れが叫ばれている現代、ましてや学生の年齢を考えると、授業の単位のための参加ではないだろうか、それを評価して意味があるのだろうかなど、学生のデザイン画を見るまでは正直、自ら進んでの参加ではありませんでした。しかし、展示してある学生の作

品を見て、自分の認識が間違っていたことに気づきました。座談会を通して、作品に対する彼らの想いを話すときに見られる学生の姿勢は真剣そのもので、デザイン、色、発想など学生の生み出す斬新な仏壇・仏具に正直驚きました。仏具は本来それぞれの宗派において決まっているものという概念にとらわれて、創造していくことを半分あきらめてしまっていた私自身に、この座談会を通して、「宗教とは・・」、「仏具とは・・」、「故人を偲ぶとは・・」ということを改めて見つめ直すきっかけになりました。

近年の日本では、昔ほど宗教・宗派というものを考えなくなってきているのは事実だと思います。しかし、対談の中で『もし親が亡くなったとき、仏壇を置きますか』と質問したところ、8割ほどの学生が『置く』と答えました。宗教・宗派は良くわからないけれど、亡くなった故人を偲びたいという気持ちがそうさせたのではないのでしょうか？ 本来仏壇は、亡くなった先祖を供養する為のものですが、仏壇を拝むことによって、『その先祖と親があるからこそ現在の自分がある』ということを再認識し、そのことに感謝する自分の為のものでもあるように思います。

この座談会は、『新しいデザインの仏具』というテーマが始まりでしたが、仏教でいう『五供』（仏壇のお供え）を基本とするのか、それとも、全く別の形体にするのかは、その人がどのように故人と向き合うかという問いに対しての回答だったように思います。

長い、短いがありますが、どんな人にも必ず死は訪れます。身近な人が亡くなったときどう向き合うかは、個人の考え方が多様化している現在、変化していくのは当然だと思います。しかし、故人を偲びたいという気持ちそのものは、人として生きていくうえで、永遠に変わらないものではないのでしょうか？ 「大切な人を供養する為の道具」という仏具の永遠のテーマに対して、今後は、より真摯な姿勢で取り組めそうに思います。有意義な座談会に参加させていただきありがとうございました。

8. 連携授業を受講した学生の感想

中田久子（高岡短期大学部専攻科 産業造形専攻）

私はグループ課題では仏教の根本にある『六波羅蜜』について調べ、そこから発展させて新しい仏具のデザインを考えました。まず、日本に暮らす人の宗教観について深く話し合いました。途中、グループ内であまりに重く考えしまい、前に進まず、このまま形が決まらないのではと心配することもありました。でも、自分ならこんなものがほしいという単純な自分たちの感性と、三具足の機能を見つめ直し、なんとかまとめることができました。グループの仲間とは良い仕事ができたとと思います。特に模型を作る際には金属・木材コースの人の知識に助けられることが多く、良い勉強になりました。

個人の課題に取り組む前に仏具屋さんに見学調査に行きました。新たに仏具を購入する人の中には、水子供養のために、という方が多いそうです。それを聞いて私はそのようなつらい気持ちでお店にいらっしゃる方がいるということを知りました。そのときから、人の心に優しく触れるようなデザインにしたいと思い始めました。また私の母は毎日仏壇に手を合わせる信心深い人なので、その母が好きそうなイメージを参考にし、植物をモチーフにした三具足を思いつきました。植物なら特に女性の多くは良い印象を持ち、優しい気持ちになるのではないかと思います。そしてその植物を仏教に関連ある『蓮』にすることで、仏教と結びつけることができました。

私たちの生活は、身の回りに置かれている「もの」によって決められています。だから、ひとつの製品が新たにこの世に生まれる時の、そのデザインを考えるということは責任重大だと思います。中でも仏壇・仏具というものは特殊なもので、ある人にとっては何とも思わないようなものでも、ある人にとっては重要な心のよりどころであったり、家の格を表すものであったりします。デザイン画展示のとき、大学のエントランスホールに展示していただいた仏具組合の方が所蔵する古い時代の仏具は、美しくて重厚で、でもやさしくて、見ていてこちらの身が引き締まるような思いがしました。それがその時代のものづくりであるなら、今のものづくりとは何なのでしょう。代々受け継がれてきた仏具というものが今でも存在する意味を考える必要があると思い、自分なりに考え、そして導き出された答えをデザインの根底に置きました。今回は仏具という難しい課題ではありましたが、高田製作所の方のいろいろなご意見を聞かせていただいて、とても良い経験ができたと思っています。ありがとうございました。

渋谷祥代（高岡短期大学部専攻科 産業造形専攻）

今回の課題のテーマは、「新しい仏具の提案」だったので、「死」や「故人を偲ぶ」という事を真剣に考える良い機会になったと思います。しかし、私たちの年齢では、「偲ぶ」という事が、あまり身近に感じる事ではないので、とても難しい課題となりました。

私の出身は東京の都心で、家も狭く、仏壇がありません。その代わりに、ダイニングの食器棚の上に、写真、線香立て、ガラスのコップ、おりん、花瓶が簡単に置かれています。この事を同じグループのメンバーに話してみたら、「もし、身近な人が亡くなったら、どのような仏具が欲しいか」というテーマに絞ることにし、グループ課題のコンセプトが、「都心に住んでいる核家族をターゲットに、置く場所を選ばないシンプルな調度品」ということに決定しました。他のグループも皆、従来の仏壇・仏具から離れ、「シンプルな仏具」を考えていました。

中間発表で、それぞれのグループがプレゼンテーションしてから、今回の「総合工芸演習」の授業自体が、「今までにない、新しくシンプルでインテリアにもなるもの」という、ひとつの方向に進んで行っていたように思います。もちろん、その時私は、自分の家庭環境や父が亡くなったという経験から納得していました。

仏具組合の方々との話し合い（座談会）でも、「学生の考えは、斬新で面白い」と、評価していただきました。しかし、話し合いが進み、意見を交わしていくうちに、あまりにも一つの考えにまとまり過ぎて、私はなんだか少し恐くなりました。まるで、従来の仏壇・仏具を否定するかのような意見が出てきてしまい、組合の方もその意見を受け入れようとなさっていました。その話し合いでは、少子高齢化のことにも触れました。人口が減っていくことや、高齢化が進み若者に負担がかかることなど、これからものづくりをしていく私たちはどうしたら良いか、という話にもなりました。そういった話し合いの中で、一人の学生が手を挙げ、「私には高齢者が多いと何が悪いのか、今までの仏壇のどこが悪いのかわかりません。」と言いました。彼女は、私と同じグループでした。私は、一つの考えでまとまり始めていた会議室で、手を挙げ自分の意見を堂々とやった彼女の勇気にととても感動したと同時に、グループでの話し合いで自分の考えばかりを言っていた自分が、とても恥ずかしく思えてきました。もしかしたら彼女に対して無神経に発言していたかも知れないと、その時初めて気が付きました。「仏具を考える」ということが、いかにデリケートなことであるか思い知らされました。

このような難しい課題は、同じ21歳でも仏具に対す

る考えが全く違う人がいる、ということも、もう少し理解した上で取り組むべき課題ではないかと思いました。会議室の空気の流れを変えた彼女の言葉は、今の私にとって本当に大きなものになっています。彼女の言葉がなければ、「新しくシンプルなものが良いモノ、昔からある装飾的なものが無駄なモノ」という考えがごく当たり前のものになっていたと思います。

「新しい仏具を考える」という、たった一つのテーマが、私に色々な事を考えさせ、また、気付かせてくれたと思います。

井上悠（高岡短期大学部専攻科 産業造形専攻）

ここ数年間で我々日本人、その中でも特に若い世代の宗教観や死に対する考えが大きく変化し、多様化してきている。しかしそれは決して宗教や死に対して無関心になってしまったと言う様な虚しい方向を歩み始めている訳ではない。

いかなる時代においても人の死は特別な感情に浸ってしまう。それは人間が感情を思いのままコントロール出来ないうちは変わる事のない「人間」らしい姿だろう。ただ先程述べた変化・多様化と言う意味では、昔から信仰されている亡くなった人を供養する事でその人は成仏して「仏」に生まれ変わると言う考え方は、現代においてはあまりにも現実味の無い話だ。それについてこの前まで側にいた人が「仏」などと言う別次元の存在になってしまう決まりに私は違和感を覚えてしまう。今回、学生がデザインした仏具をとっていても半分近くが偲ぶ対象として遠い存在に感じる「仏」ではなく、亡くなった本人、「人間」をいつでもどこでも思い出せる様なものが多く提案された。おそらく若い世代は亡くなった人をもっと身近に感じていたいし、その人との記憶を鮮明に覚えていきたいのだと思う。「亡くなくても本人は本人のまま」この気持ちは私にもよく分かる。

ちなみに私のグループがデザインした仏具も仏壇に供えて「仏」になった人を供養する物ではなく、亡くなった人を忘れない様にいつでもどこでも思い出すことができる空間を演出するものを提案した。おそらく仏具組合の方々から見ると仏具と言うよりインテリアやクラフト商品に見えたのではないだろうか。色々と問題はあったが話し合いを重ねるうちに少しだけ私達が伝えようとしていた「亡くなくても本人は本人のまま」、「偲ぶ対象は亡くなった本人」と言うコンセプトを理解してくれたみたいだ。残念ながら私のグループの仏具はコストの関係上商品化には漕ぎ着けられなかったが、自分の中では優れているデザインと確信しているので何か違う方法で世に送り出してあげたいと思っている。

さてこれからますます少子高齢化に拍車がかかり、核家族が当たり前の時代がやってくる。核家族が増加するという事は、まわりに昔からの仏教的習慣をきちんと理解している者が減少する可能性がある。そうなった家庭はわざわざ狭い居住スペースを奪ってしまう高価な仏壇を買ってまで先祖や亡くなった人を供養するだろうか。もっと手軽で重々しくない雰囲気のある仏具に変化していくかもしれない。まさに今その転換期なのだと思ふ。仏具をデザインしてみても身をもって気付かされた。

9. 連携授業の意義と今後の取り組み

高橋誠一（前掲）

大学外の組織と連携して授業を作っていく事は、教員が上手く誘導していければ、学生にとって大変刺激の多い、意義深い授業となり得るものである。条件として、教員の誘導が不可欠である事は、今回の授業を通して、痛切に感じた事である。高岡仏具卸業協同組合からの依頼で始まった今回の授業は、仏具と言う宗教と直結した製品を扱うという事で、教育の場において、特定の宗教を取り上げる事はふさわしくないとの判断から、学生への課題には、「死者を偲ぶための調度品」という言葉を使い、一般性を持たせたのであるが、その事が学生を戸惑わせる一因と成った事は否めない。加えて今回は、組合からの要請も有り、仏具に対する知識を積極的には与えずに、学生の若い感性を存分に発揮させたデザインをさせるとの方針で始めたのも、学生の目標設定を迷わせる一因で有ったであろう。つまり、教員のちょっとした匙加減で、大きく効果が変わってしまうものだと、単独で行なう授業以上に感じられた。

今回の授業は前期2課題、後期2課題の計4課題を提出させる授業で、学生は、4課題をこなすだけで時間が足りない状況であったが、今後の授業の進め方としては、学生達が資料を集め、現状を把握し、コンセプトを作り、そのコンセプトに対してしっかりと考察をしてデザインをし、そのデザインをプレゼンテーションするための資料作りと各項目にしっかりと時間をかけられるように、課題数を減らす方向で考えていくべきだと考えている。

また、依頼主である組合の方と学生との意見交換の場は、今回は、授業終了後、授業成果である学生のデザインを見てから、座談会という形式で一回だけ行なったが、その機会を増やす方向で考えていくべきではないかと思っている。せつかくの専門家集団であるので、学生としっかりと意見交換をし、双方にとって刺激の与え合える関係を作っていければ、それぞれの今後に有意義なものとなるであろう。そのためには、組合の

代表者の方々と教員との意思疎通は欠かせないものであろう。

河原雅典（前掲）

先祖供養や宗教観の変化、および住宅環境の変化に対応した新しい仏具、もしくはそれと同様の祭壇調度品のデザインは、授業には良い題材であると思う。調査やそれに基づき発想する部分と、造形作業の部分の要素がバランスよくあるからである。学生の満足度から見ても、題材そのものには問題がないようであった。

この授業に対する学生の印象を複雑にしたのは、連携授業という形式であったように思う。

そもそも連携授業の意義とは何であろうか。

野球で考えよう。はじめて野球を覚えるときにいきなり試合をすることはできない。当然キャッチボールや素振り、ノックから練習が始まる。基礎体力をつけるためのトレーニングも組み込まれる。しかしそのような基礎練習ばかりでは野球に対する興味を失い、練習意欲が低下するであろう。そんなときには試合形式の練習をしたり、対外試合をしたりすることで、野球の楽しみを再認識し、練習に対する意欲が増す。試合の経験から、基礎練習の意義を知ることにもなる。つまり、通常の授業が基礎練習ならば、連携授業は練習試合、対外試合である。ここに連携授業の意義がある。

ではそんな連携授業を有意義に機能させるにはどうしたらよいか。大学側としてはまず基礎練習と対外試合のバランスを考えることが大切である。授業の目的を明確にした上で、どのタイミングで、どのような相手との試合を組むかが、大学側に科せられた課題である。それを果たしていくには、企業、大学教員、学生のコミュニケーションが大事だと痛感している。

渡辺雅志（前掲）

本連携授業の成果の到達点はどこに設定するべきか。高岡仏具卸業協同組合側の求める到達点と我々大学側が求める到達点を同じにするべきか。ここをまずは明確にしなければならない。すぐに市場に投入できるような商品を開発するのか、将来に向けてのビジョンを示す提案も必要なのか。私はどちらも必要なことだと考えます。もしどちらか一方に課題が絞られてしまうと、それはリアリティのない、説得力のない提案になってしまうように感じます。現状を理解し、その中でどんな商品が求められるのか、なぜ求められるのかを考え、本当の理解がなければ、将来の仏具のあり方などは到底提案できないとも言えます。

この授業が立ち上がった当初は、デザインを行う学生に先入観を抱かせないために、あえて組合の方の仏

具に関するレクチャーを後半に設定しました。より自由で制約のない、今の若者の考え方から生み出される仏具・調度品を期待されてのことでした。結果からいえば、確かに自由な発想から生まれたデザインがほとんどでした。この点では第一回目の連携授業としては両者が満足のいくレベルであったと言えます。しかし今後のことを見据えて全体を振り返ると、組合側と大学側で求めている結果にギャップがあるように感じています。これは特に座談会で感じたことです。組合側は学生の柔軟な発想力に期待をしている反面、かなり近い将来の市場性やニーズ、価格のことまで気にされていました。大学側ではそれらはあくまで結果であり、そこにいたるプロセスが大切で、この授業で得た知識や経験が、学生にとって今後のものづくりの発想力につながればという想いがありました。

しかしこのギャップはなるべくしてなった結果です。組合側と大学側の求める到達点を明確にしなかったことがこのギャップを生み、課題に取り組む中で困惑した学生が現れたのも事実です。

本授業の今後の課題として、課題の到達点を明確にすることは必須です。課題の出題者側として、学生の力を120%引き出せるよう考えなければならないし、連携するお互いにとっても有意義な授業にしなければなりません。

本連携授業は第一回目ということもあり、組合側にとっても大学側にとっても非常に多くの刺激を受けました。その反面、授業を行う上での課題も多く見えました。このような現実的な課題に取り組む機会は、まさに生きた授業として大学側にとってもありがたい限りです。地元の伝統産業の問題に直に取り組める貴重な機会として今後も継続し、結果として地域貢献にもつなげられるよう努めていきたいと思います。

謝辞

学生を代表してこの授業の感想を書ってくれた、高岡短期大学部専攻科（授業履修時）の中田久子さん、渋谷祥代さん、井上悠さんに感謝します。

参考文献

1) 国立大学法人高岡短期大学教務委員会「同学生による授業アンケート調査報告書作成専門委員会学生による授業アンケート調査報告書」、国立大学法人高岡短期大学学生課、2004